近代日本におけるモンテッソーリ教育法の実践

西川ひろ子（安田女子大学文学部准教授）

研究目的

モンテッソーリ教育法がわが国に紹介されたのは、大正期であった。大正自由教育の流れの中、欧米の教育情報が積極的に文献で紹介され、海外視察が行われ、海外から教師を招いて講演や講習会が開かれ、新しい教育を見出そうとした時期でもある。幼児教育界においても同じであった。東京女子師範学校教授で『幼児と教育』の編集及び執筆を担当した倉橋惣三が、フレーベル主義による恩物に偏った「手技」の保育を批判したことへの影響は大きかった1)。現場の保育者たちに対して、新しい保育を構築するための講習会と保母不足を解決するための保母養成講習会が盛んに開かれた。さらに、木村久一による『早教育と天才』が出版されるなど早教育への関心が高まった時期でもある。

このような背景のもとに紹介されたモンテッソーリ教育法は大きな注目を集め、大正10年（1921）の『文部省調査』「保育方式に関する調査」が、全国781の幼稚園の中で251の幼稚園がフレーベル式とモンテッソーリ式を加味した保育法を実践していると報告するように、わずか数年で３分の１の幼稚園に影響を及ぼした。しかし、熱狂的に受け入れられたにもかかわらず、第二次大戦のためにわずか数年で批判されることとなる。この傾向はわが国だけではなく、世界的な傾向であった。しかし、戦後、モンテッソーリリバイバルというモンテッソーリ教育法の世界的な実践運動が展開される。

わが国にモンテッソーリ教育法がもたらしたものは何であったのか。大正期のモンテッソーリ教育法の実践状況はいかなるものであったのか。明らかになっていない部分が多い。先行研究では、反米感情とつながる西洋情報の禁止や、社会情勢の不安定のために実施された期間が短いことや、戦前の保育界の主流であったフレーベル主義への執着が大きいために実践には至らない園が多かったことなどが指摘されている2)。

本稿では、モンテッソーリ教育法が近代日本において受容される過程を明らかにし、同教育法を実践した幾つかの幼稚園での状況を比較検討し、わが国におけるモンテッソーリ教育法がいかなる状況で試みられたのか、また、その意義について明らかにすることを目的とする。

近代日本でモンテッソーリ教育法が実践されるまでの過程

モンテッソーリ教育法は以下の４つの側面から受容された。１点目は新聞・雑誌及び著作等の文献による紹介、２点目はモンテッソーリ教育法を実践できる教員養成のための講習会・講演会の開催、３点目はモンテッソーリ教具の普及。そしてモンテッソーリ教育法の幼稚園での実践である。

モンテッソーリ教育法の最初の紹介は、明治45年（1912）１月11日の『万朝報』の「モンテスリ教育」という記事であった。この記事を読んだ倉橋は、アメリカから教育雑誌を取り寄せて研究し、各地の幼児教育関係者達の研修会や講習会で講義した。この影響は大きく、関西の保育界ではフレーベルに代わる新しい幼児教育方法として各園で情報収集や研鑽を始めている。最初に実践をしたのが望月くにの神戸幼稚園であった。また、各園や玩具店であるフレーベル館からの要望で、京都大学の野上俊夫や日本女子大学付属豊明幼稚園主事の河野清丸らも研究を始めた。

資料１：モンテッソーリ教具に関わる事項年譜

明治45年（1911年）	１／１	・「ﾓﾝﾃｽｿﾘ教育」『万朝報』（最初のﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教育法の紹介）
	６／２	・倉橋惣三「保育の新目標」京阪神連合保育会講演（倉橋と京阪神連合保育会との最初の結び付き）
	８月～	・野上俊夫「ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ女史の科学的教育学を読む」『教育学術界』25巻5号～26巻6号（ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具の図説）
	11／２	・神戸市善隣幼稚園にｱﾒﾘｶより小冊子『ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ女史教育的器具』贈られ、神戸幼稚園で翻訳される。
大正2年（1913）	２月	・神戸幼稚園望月くに、神戸保育会総集会にて自作のﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具披露（竹の皮の触覚練習具、着脱人形、小さいﾋﾟｱﾉ）
	４／15	・佐藤満寿「ﾓﾝﾃｿﾘｰ氏教育的器具に就て」『京阪神連合保育会雑誌』
	４／20	・野上俊夫「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ教育法」（大阪西区保育会講習会）－自作のﾓｯﾃｯｿｰﾘ教具持参
	７月	・ﾌﾚｰﾍﾞﾙ会第18回総会の席上、ﾌﾚｰﾍﾞﾙ館「ﾓﾝﾃｯｿﾘ式教育具出品」
	９／15	・大阪天真堂ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具販売。解説書・清水幾多郎『ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教育法 教育界の奇跡』が同時販売
大正3年（1914）	１／１	・河野清丸日本児童学会例会で「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ博士の教授用具に就て」講演
	２／１	・河野清丸「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ博士の教授用具に就て（上）」『児童研究』17巻6号（日本児童学会例会演説内容掲載）
	６／１	・河野清丸「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ博士の教授用具に就て（下）」『児童研究』17巻7号（日本児童学会例会演説内容掲載）
	７／25-	・河野清丸『ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ教育法と其応用』同文館
大正4年（1915）	３月	・河野清丸「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ氏の教育法」（京都保育会講演）
	３／10	・ﾌﾚｰﾍﾞﾙ館ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具販売
	９／17	・『婦人と子ども』15巻3号にﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具の広告掲載（これより数号にわたってﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具の広告掲載）
昭和3（1928年）		・河野清丸『ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ教育法真髄』北文館 ・河野清丸『門氏教育法及批判』北文館（ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具の解説書）

フレーベル館からのモンテッソーリ教具販売までの過程を資料１としてまとめた。

モンテッソーリ教育法の実践の特徴

（1）最初の実践幼稚園―神戸幼稚園の特徴

明治45（1912）年６月に行われた倉橋の講演は、京阪神を中心とする保育関係者のモンテッソーリ教育への関心を高め、同教育法が保育実践に取り入れられる大きな要因となった。わが国で最も早期のモンテッソーリ教育法の実践は、大正元年（1912）11月２日に神戸幼稚園で発表された。この最初の実践では、モンテッソーリメソッド（モンテッソーリ教具）の代用に、竹の子の皮を活用してモンテッソーリ教具の感覚教具を作成するなど、幼児の周囲にあるものが用いられた3)。

翌年の大正２年（1913）２月は、モンテッソーリメソッドの販売と、各地でモンテッソーリ教育法の講習会が始まった。講師は、野上俊夫、河野清丸、倉橋惣三等であった4)。神戸幼稚園では、幼児の興味を促すためにモンテッソーリ教育法を既存の遊戯に組み入れた上で、モンテッソーリメソッドの代用に自然物を活用するといった工夫がなされていた。その例に、モンテッソーリの「着脱枠」の代用に人形遊び、モンテッソーリの「目かくし遊び」の形態に唱歌を加えた「目のない千鳥」が挙げられる5)。

これらの実践に対して、後に城北幼稚園でモンテッソーリ教育法を実践する野口援太郎は「施設等はまだ十分であるといふことは出来ないが、しかし色々新しい思考方法等を参考にし、殊にモンテッソリーの教育法の精神を採って日本の幼稚園殊に設備の不十分なる其の幼稚園に於て行はれる様に工夫してやって居つて色々苦心の跡が見られて居る。相当の成績が必ず収め得ることを信ずる」と多大な評価を与えている6)。

（2）フレーベル主義との併用による実践
―島根県女子師範学校附属幼稚園

前述したように、大正期、多くの幼稚園が明治期より実践してきたフレーベル式とモンテッソーリ式を加味した保育を実践していた。その１例が島根県女子師範学校附属幼稚園である。

島根県にモンテッソーリ教育法が直接に紹介されたのは、大正元（1912）年９月の『島根県私立教育会雑誌』293号に掲載された米田仁太郎の「マリアモンテッソリー女史の児童の家を紹介す」の記事からである。当時、広島高等師範学校教授であった三沢糾（ただす）によるモンテッソーリ教育法の講演の反響がいくつかの地方教育会雑誌で取り上げられていた7)。米田は、児童の家の概観にふれ、「我等に取りて最も興味あるのは女史の知能教育法である」と知育にモンテッソーリ教育法が効果的であることを強調した8)。

この記事より大正４（1915）年２月３日に附属幼稚園がモンテッソーリ教具を購入するまで、モンテッソーリ教育法に関する記述を島根県では見受けられない。島根県におけるモンテッソーリ教育法の受容と実践は、モンテッソーリ教具の購入より始まったのである。この傾向は、全国的なものであり、自作のモンテッソーリ教具の作成を行った神戸幼稚園などは例外であった。

恩物を用いた保育に執心し9)、資金難による廃止論に常に直面していた附属幼稚園が高価なモンテッソーリ教具の購入に至ったのには３つの背景があった。一つ目は、幼児の保護者全員参加による協賛会の発足により寄付金収集の方途がひらけたこと10)。二つ目は、幼稚園廃止論に対抗するために、幼稚園の教育効果の強調する必要性に迫られていたこと。三つ目は、東京フレーベル会とのつながりである。フレーベル会は、幼児教育研究を担う東京女子高等師範学校と玩具作成を担うフレーベル館が中心となって組織されていた。

同会には、幼児教育界に最初にモンテッソーリ教育法を紹介した倉橋惣三、フレーベル館のモンテッソーリ教具の作成責任者であった河野清丸、そしてアメリカでモンテッソーリと面会した経験をもつ久留島武彦が所属していた。

附属幼稚園は、協賛会より得た寄付金20円とフレーベル館とのつながりにより、販売の１ヵ月前の大正４年（1915）２月３日にフレーベル館からモンテッソーリ教具を購入したのである11)。ただ、全部を購入するまでに至らなかった。知育に有効なモンテッソーリ教具は、そのまま小学校への準備教育となっていく。

かねてから附属小学校との連携が密接であった附属幼稚園は、翌３月31日に附属小学校の訓導であった竹田ミネを保母として迎えた12)。竹田は、小学校の訓導と幼稚園の保母の兼任であった。附属幼稚園の保母は、板倉紀代、竹田ミネの２人となり、大正５年（1916）11月に竹田と同じく小学校教員であった富田八千穂を迎えることになる13)。富田は、昭和９年（1934）まで附属幼稚園の保母を勤め、戦前の島根県幼稚園教育の中心者であった。彼女らにより、幼稚園と小学校との連携を念頭においた徳育や知育を重要視する幼稚園教育の方向性が確立されていった。

また、これらの幼稚園教育の効果や教育内容を広く知らしめ、幼稚園振興のために機関誌『千くさ』が大正４年（1915）６月より発刊された。『千くさ』により教育内容を宣伝することに成功した附属幼稚園は、翌

大正５年（1916）に寄付金15円30銭でモンテッソーリ教具の残りを購入した14)。数日後、竹田はモンテッソーリ教具の整理を行い、附属幼稚園は寄付をしてくれた人たちを招いて茶話会を開いている15)。そして、『千くさ』にもモンテッソーリ教具が如何なるものであるかを紹介したのであった16)。

（3）早期教育を目的とした実践
――姫路師範学校附属城北幼稚園

姫路師範学校附属城北幼稚園は、大正７年（1918）５月10日、姫路師範学校寄宿舎養神室を園舎として開園した。教育には、神戸幼稚園を見学した野口援太郎が園長に、幼稚園主任として同校卒業者であり野口の弟子であった苦瓜恵三郎と、保母１人と助手１人が携わった。保育科目には野口の幼児観や教育方法の思想が明確に反映されていた。園の目的は「単に遊ばせておくことだけでなく、彼ら園児に適当な刺激をあたへて、適当にその知能を啓くことをも目的としているので、彼等に課する科目は、単に遊戯などのような体育的のものでなく、園児の発達の程と其の興味の発動とに応じて読方、計数、書方、図画等の初歩をさづけその知能を開くようにつとめておる」であった17)。

これらの中でモンテッソーリ教育法の影響が顕著に見られる「感覚練習科」と「観察科」と「労作科」について言及する。

まず、保育科目の第一に挙げられている「感覚練習科」が「感覚器は知識の門戸である。ことに、視、聴、筋覚が最も智識収得に関係が深い、この故にたへずこの方面の練習をする」と内容規定されている18)。ここから野口が、感覚と知識の習得とを関連させて捉えていたことがわかる。このことは、モンテッソーリの「３歳から７歳の間は、子どもの受ける感覚が合理的な方法で発達するように感覚刺激を組織的に導くべき時である。この感覚教育は、子どもが明確で高い知性を打ち立てる基礎となる感覚器官を育成するであろう」という感覚器官の発達と知能の発達とを連関させる思想に通じている19)。

モンテッソーリは「感覚教育は人間を観察者にする。そして、それは現代のような文明時代への適応を果たすだけでなく、実際生活への準備となる」と論じ、観察が感覚教育にとって重要であること、それらの活動は、幼児の実際生活の準備になることを主張していた20)。この思想に対応して、野口は幼児が雑巾がけや溝掃除などをする「作業科」を保育科目中に設定した。さらにモンテッソーリが「子どもは、自然に対する感情でその創造性や能力を伸長させる。（中略）自然に対する感情を最も発達させるのは、生きているものを栽培することである」と論じ、教育の場を自然物との関わりの中に求め、殊に栽培を教育に取り入れることを主張した21）ことに対応して、外物を正しく知覚することの練習を目的とする「観察科」と、栽培を行う「作業科」を設定した。「作業科」は、幼児の自律を促す実際生活の練習のための掃除と自然とのかかわりあいである栽培を統合したものであった。

当時の幼稚園では、園芸のような労働が実践されることは少なかった。労働が城北幼稚園では保育科目に位置づけられ、実践されたのである。これは、「自らのことが出来ないものは奴隷であり、独立していない。真の自由を与えられないばかりか、自発的な活動性を窒息させがちである」というモンテッソーリの思想の影響が大きい22)。労働により早期に自立した子どもを育成することが目的となったことが掃除や園芸等の「作業科」実践導入要因であろう。早教育が目的される中で、裕福な家庭の子女に、雑巾がけや掃除や園芸といった労働をさせることの意味が再発見されていったのである。

保育科目と対応する遊びが実践されている。これらの遊びの中で「感覚練習科」に即した遊びは、「モンテッソリ氏感覚練習の使用」と「その他の感覚練習のための遊戯」であった。これらの遊びも、「感覚器官は実に知識の門戸であつてその鋭鈍は直ちに以て知識修得の多少に影響するものである」という感覚器官発達と知能の発達とを連関させた思想のもとに実践された23)。この遊びには「例のモ氏感覚練習具」、つまりモンテッソーリメソッドが使用された。このように野口の実践は、モンテッソーリの児童の発達観に基づきその教具を活用したものであった。

一方、モンテッソーリ教育法と相違は、方法面での２点である。第一は、感覚器官の教育への偏重である。これは、聴覚を鋭敏にし、記憶力を向上させるための黙想、聴覚練習のため眼かくしをした状態でオルガンの音の高低をたよりに物を探す遊び、触覚練習のために同じく眼を閉じて、小豆と大豆と麦と米を混ぜたものから指定された穀類を取り出す「穀粒選み」等を積極的に取り入れている。この実践は「眼は日常使用することによつて比較的その鋭敏さを増して行くものであるが、聴、触、筋覚の三つは特に機会を作つて、多くの練習をせしめなけれ十分発達することが出来ないものであると思ふのである」という野口の見地に基づいていた24)。これら一連の実践は、モンテッソーリの「目かくしゲーム（The Games of the Blind）」と神戸幼稚園の「目のない千鳥」を参考にしたと考えられる。これは、子どもが目かくしをして、感触を頼りに布の種類や豆やおもちゃ等を当てるゲームである25)。

だが、モンテッソーリは調和的発達をめざし、沢山の教具を考案している。野口のように感覚器官に偏重することはなかった。

第２点目の相違は、興味の捉え方である。モンテッソーリは「『意図的に興味を持たせようとする』、つまり興味のない人に興味を持たせようとするのは、大変難しい仕事である。しかも共通点のない人を一人ではなく多数の人を長時間引きつけておくのは超人的な業である」と意図的に興味を持たせることの困難さを主張した26)。一方、野口は「常にこれを遊技に仕組み、ことに競争的に子どもの興味をそそりながらこれを練習せしめる」ことに留意し、教師が意図する活動を子どもが進んで行うための工夫を教師が行うことを奨励した27)。野口の幼児の興味を促すためにすでに子どもたちが知っている歌や遊びを題材にするといったこの工夫は、神戸幼稚園の「目のない千鳥」を参考としたと思われる。この実践は、城北幼稚園ではすでに幼児が歌っている「雁雁わたれ」の替え歌を歌いながらモッテッソーリ教育法を行うといった工夫が施されていた。

野口の自由教育は放任ではなく、自立した子ども等による自発的な自習活動であった。そして、そのような子どもの育成には、知能の発達と連合した感覚教育が不可欠とし、その具体的な教具にモンテッソーリメソッドを採用したのであった。この思想に基づく城北幼稚園の活動は､「早教育」を目的とした実践であった。野口は、「幼児の自立」という点で自由教育と早教育とを直結し、その思想の裏づけと方法にモンテッソーリ教育法を導入したのだろう。

大正期における
モンテッソーリ教育法実践の特徴

『幼稚園教育九十年史』において、文部省が大正10年（1922）12月現在で「モンテソリーの遊戯は分解的、抽象的、組織的、一時的であるが、フレーベルの遊具は思想構成的、総合的、具体的、永続的であるとか、モンテソリーには種々の良い点があるが、その多くはフレーベルの方法を深く研究すればその中に含まれている」と結論づけたように、近代日本の幼児教育は、フレーベル思想、実践の方法としてモンテッソーリ教育法が中心であった。その目的は、従来の恩物批判の解決方法や、小学校と幼稚園教育との連携や早期教育の具体的な方法のためであった。恩物の代わりに用いられたモンテッソーリ教具は特に感覚練習に関する物に人気が集中し、その結果、幼児教育の場では、再びフレーベルに帰る動きが現れたりもした。近代日本におけるモンテッソーリ教育法は、幼児教育者が新たな教育法を模索する試みを始めたり、科学的な保育方法や視点を保育現場に導入した点で評価されると考えられる。

＜注＞

1）倉橋惣三,「フレーベル主義新釋　静岡縣保育會第六回總會に於ける講演大要」,『婦人と子ども』12号（6），pp240 - 246，1912
2）吉岡剛,「モンテッソーリ法への『第一期』の対応――受容と挫折の１サイクル――」，池田進・本山幸彦編,『大正の教育』，第一法規出版，1978
3）「神戸市保育会記事」,『京阪神連合保育会雑誌』30号，pp.43 - 44，1913
4）『京阪神保育連合会雑誌』のモンテッソーリ教育法の講習会等の記述による。
5）佐藤満寿,「モンテッソーリー氏教育的器具に就いて」,『京阪神聯合保育会雑誌』30号，pp.11 － 16，1913
6）野口援太郎,「神戸市の教育」,『遠近会教育』第１巻２号，p.16，1918
7）三沢糾,「開発主義の新教育者モンテソリ」,『愛媛県教育』300号，1912,5,「モンテッソリの児童の家」,『芸備教育』98号（三沢糾講演内容），1912,6
8）米田仁太郎 ,「マリアモンテッソリー女史の児童の家を紹介す」,『島根県私立教育会雑誌』293号，p.20，1912
9）島根県師範学校附属幼稚園は、明治44年５月に島根県主催の子ども博覧会に恩物及び幼児成績品を出品するなど、恩物を用いた保育を重要視した。(『島根県師範学校附属幼稚園沿革史』島根大学教育学部附属幼稚園蔵）
10）『島根県師範学校附属幼稚園　沿革史』島根大学教育学部附属幼稚園蔵
11）『島根県師範学校附属幼稚園　大正三年度日誌』島根大学教育学部附属幼稚園蔵。協賛会の寄付20円にて購入したことは『島根県師範学校附属幼稚園機械雑品記録簿』（島根大学教育学部附属幼稚園蔵）に記録されている。
12）『島根県師範学校附属幼稚園　大正３年度日誌』島根大学教育学部附属幼稚園蔵
13）島根大学教育学部附属幼稚園編刊『附幼百年のあゆみ』p.144，1986
14）「モンテッソリー女史館感覚練習器購入」,『千くさ』第７号，pp.4 - 5.，1916，（島根大学教育学部附属幼稚園蔵）
15）『島根県師範学校附属幼稚園　大正五年度日誌』島根大学教育学部附属幼稚園蔵
16）「モンテッソリー女史及其教具に就いて」,『千くさ』第７号，pp.5 - 6，1916
17）苦瓜恵三郎,「城北幼稚園の教育」,『遠近会教育』第２巻10号, p.14，1919
18）野口援太郎,「早教育幼稚園設立に関する方案」,『遠近会教育』第１巻４号，pp.13 － 14，1918
19）Maria Monntessori “The Montessori Methed” 19 12、pp.215 - 216.（Translated from the Italian　by Anne E.George）
20）bid.p.218
21）19）ibid.pp.159 - 160
22）19）ibid.pp.98 - 99
23）17）の前掲論文 .p.17
24）17）の前掲論文 .p.18
25）野口援太郎,「早教育幼稚園成立に関する方案」,『遠近会教育』第１巻４号，pp.15 - 16，1918
26）Maria Montessori “The Advanced Montessori Method,1”，p.78，1917
27）25）の前掲論文，pp.15 - 16